

- (1) 平尾聚泉 1974年 「古貨幣図録 昭和泉譜」第1巻 歴史図書社
- (2) 大鎌淳正 1978年 「古銭語辞典」 日本貨幣商協同組合
- (3) 日本銀行調査局編 1974 「国録日本の貨幣3」 東洋経済新報社
- (4) 著者不明 「古今宝鏡図鑑」ともいい、一般に元禄9年刊行といわれるものが初版本である。
- (5) 港区芝公園1丁目遺跡調査団編 1988年 「芝公園一丁目 増上寺子院群－港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書－」 東京都港区教育委員会
- (6) 橋口吉文 1997年 「SKT43地点・堺市甲斐之町東6丁」「堺市文化財調査概要報告第62冊」 堺市教育委員会
- (7) 野田芳正 1998年 「SKT528地点・堺市熊野町東5丁」「堺市文化財調査概要報告第71冊」 堺市教育委員会

6. 出土須恵器の年代・性格と終末期古墳遺存の可能性について

今回の調査地では、ごく僅少ながら古墳時代終末期の須恵器片が出土している。出土位置、出土状況並びに遺物所見については、既に詳述している（V.5.出土遺物(1)）が、ここで改めて取り上げ、そのもつ意味について若干の考察を加えておきたい。

出土した須恵器片（第62図3）は、全体の約8分の1程度を残す杯蓋で、天井部にあつたはずの宝珠つまみを欠く。復元口径10.2cm、残存器高2.0cmを測り、口縁部内面にはカエリが取り付く。カエリ部分での復元径は8.7cm前後になろうか。色調・胎土は報告のとおりである（97頁）。その年代・編年的位置については後述する。

この須恵器片が出土した場所は水路状遺構内であり、ごく近辺から流出してきたものと考えられ、埋没時期はかなり下ることが予測される。出土地点の標高は223.4mを測り、市内では、これまで古墳時代の須恵器が出土したところとしては最高所の位置を占める。

発掘調査区内で須恵器が見い出されたことについては、さまざまな考え方があるであろう。

- (1) 集落跡が存在する可能性、(2)古墳の副葬品や供獻土器の可能性、(3)単発的な後世のなにがしかによる移動品の可能性、(4)単独で存在する祭祀遺構の可能性、等々である。

本節を立てた理由は、上記したうちの(2)によるが、(1)(3)(4)の事由を退けて、あえて(2)を考えようとする点について根拠を記し、出土した須恵器の小破片に多少なりとも歴史的意義を見い出したい。

芦屋市内で古墳時代の須恵器が出土する場合、その多くは(1)ないし(2)であるが、標高の高い丘陵や台地の立地ともなれば、(1)のケースはきわめて少ない。例えば、芦屋川右岸側では三条岡山遺跡〔森岡編 1979〕、山芦屋遺跡〔芦屋市教育委員会 1980、森岡・藤岡 1980〕などがみられるが、これらの遺跡では横穴式石室墳の遺存を想起させる伴出遺



第94図 古墳時代終末期段階に築造された城山18号墳

物や石材が出ている。標高の高い山芦屋遺跡や藤ヶ谷遺跡などでは、これまでの調査で奈良時代の須恵器も確認されており、藤ヶ谷遺跡では市内初出の火葬墓の存在が確かめられた〔喜多・竹村 2002、森岡編 2003〕。いわゆる古墓であり、単独立地の可能性もあるだろう。本例は古墳時代終末期の年代を示す須恵器であり、これらの遺跡の出土状況と同等視することはできない。また、(3)や(4)に関しては、そこまで言い切る状況証拠、あるいはうがって考える根拠はきわめて弱く、消去法的にはやはり(2)の公算を強く推測せしめるのである。

(2)のごとく古墳との関連を考えた場合、調査地点の眼下に展開する六麓莊・岩ヶ平台地上の八十塚古墳群〔森岡・古川編 1979、関西大学文学部考古学研究室編 2002〕は無視できない存在である。その場合、本地点は同古墳群の北限地よりさらに470m程離れた距離にあり、標高224mと高度も高く、群集墳の一角と考えるにはその立地条件からしてもやや無理がある。

しかし、いま一度出土須恵器を検討するに、その型式は飛鳥・平城宮分類の杯Gの範疇に入り、西弘海編年の飛鳥IIの段階に比定できる〔西 1986〕。大阪・陶邑古窯跡群では田辯昭三編年のTK217〔田辯 1966〕、中村浩編年のIII型式第2段階〔中村 1978〕の中で理解し得る資料である。いまその形態の詳細をみると、口縁端部よりカエリは低く入っており、その退行化傾向が看取される。昨今の須恵器編年研究の見直しに基づく私見では、西暦640~660年頃の年代に比定できる土器である。型式的にみて、かような須恵器杯蓋は終末期群集墳や追葬期副葬品群に通常よくみられるものであり、例えば、同古墳群においても岩ヶ平支群や苦楽園支群ではかなりの比重で同型式の須恵器が存在している。本資料は小片であり、これ以上、時期細分上での議論を続けることはできないが、示す時期はまさに古墳時代終末期であり、立地条件を検討すると、以下の点で單独墳の存在形態を探るいわゆる終末期古墳ともみれなくはない。

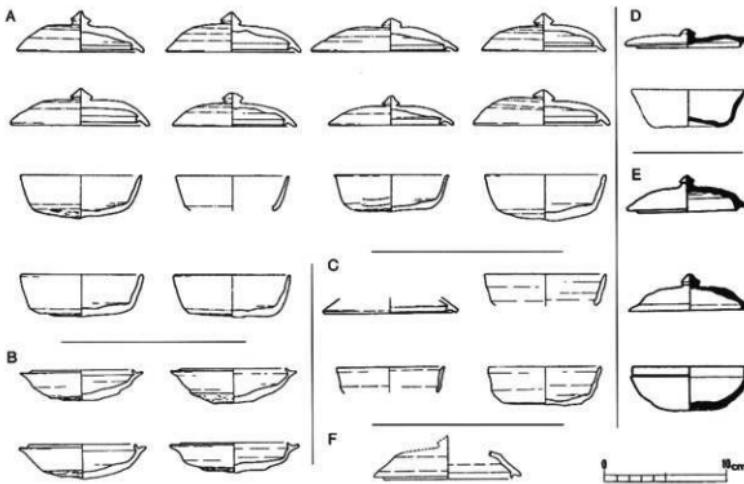
この須恵器片が採取された地点の上流側には、南北方向の尾根の西斜面にへばりつくように存在する古墳状隆起があり、尾根との間には懷状に人為的なカットが施されているように思われる。「四神相應」の地形をかなり意識したものであり、現状では想像の域を超えることはできないが、特異な立地を示す終末期古墳の存在を想定し、今後の周辺調査に期待したい。

芦屋市内ではこの数年に天武朝期まで年代が下降する城山古墳群第18号墳〔森岡・竹村 1999、芦屋市 1999〕や、8世紀の藤ヶ谷火葬墓〔喜多・竹村 2002、森岡編 2003〕が新たにみつかり、発掘調査がなされている（第94・95図）。終末期古墳や古墓の存在を射程に入れた7~8世紀史の調査・研究の意識構えが必要となってこよう。

幸い該当の箇所は、今回の工事範囲の外側にあり、山林の中に保護されることは確実なので、遠い将来になにがしかの調査が加えられることを願うものである。（森岡）



第95図 藤ヶ谷遺跡火葬墓（古墓）



A. 苦楽園5号墳（西宮市） B. 苦楽園7号墳（西宮市） C. 苦楽園6号墳（西宮市）

D. 鮫谷1号墳（芦屋市） E. 岩ヶ平1号墳（芦屋市） F. 旭塚古墳（芦屋市）

第96図 芦屋市・西宮市出土の終末期古墳副葬須恵器杯集成（1/4）
(勇・藤岡 1976、勇・藤岡・古川 1978、安田・森岡・武庫川女子大学考古学研究会 1984から引用)

〔参考文献〕

- 田辺昭三 1966年『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
 勇 正広・藤岡 弘 1976年「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
 中村 浩 1978年「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ（大阪府文化財調査報告第30輯） 大阪府教育委員会（「和泉陶邑窯の研究」（柏書房1981年刊）に再録）
 勇 正広・藤岡 弘・古川久雄 1978年「苦楽園の古墳」（西宮市文化財調査報告第2集）西宮市教育委員会
 森岡秀人編 1979年「三条岡山跡」（芦屋市文化財調査報告第10集）芦屋市教育委員会
 森岡秀人・古川久雄編 1979年「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」『兵庫県埋蔵文化財調査集報第4集』 兵庫県教育委員会
 芦屋市教育委員会 1980年『（現地説明会資料）城山古墳群発掘調査の成果』 芦屋市教育委員会
 藤岡 弘・森岡秀人 1980年『城山古墳群緊急発掘調査概報』（芦屋市遺跡調査No.8） 芦屋市教育委員会
 安田博幸・森岡秀人・武庫川女子大学考古学研究会 1984年『兵庫県芦屋市 旭塚古墳 -表六甲城山群集墳中の巨石墳の測量調査とその考证-』 武庫川女子大学考古学研究会
 西 弘海 1986年『土器様式の成立とその背景』 真陽社
 森岡秀人・竹村忠洋 1999年『平成10年度 城山・三条古墳群発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
 喜多貞裕・竹村忠洋 2002年『藤ヶ谷遺跡第5地点 埋蔵文化財発掘調査実績報告書』 芦屋市教育委員会
 関西大学考古学研究室編 2002年『八十塚古墳群の研究』（関西大学文学部考古学研究第7冊） 関西大学
 森岡秀人編 2003年『摂津・藤ヶ谷古墓-藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査-』 芦屋市教育委員会

7. 石材別にみた採石方法と花崗岩利用

現在使用されている採石の方法には、矢穴をあけて目的とした大きさの石材を切り出す場合、露岩にドリルで穴をあけて火薬で爆破して碎石を切り出している場合、地層に含まれている礫を掘り起こして採取されている場合等がある。石を削るために火薬を使用するようになったのは大正時代であり、この時期になって初めて一箇所で、深くまで掘り下げる石材を採石する花崗岩等の採石が始まるのである。芦屋市付近でみられる花崗岩の採石は、地表に点在する風化されずに残った硬い部分の石からの採石である。芦屋市付近の山中にみられる黒雲母花崗岩は石英・長石・黒雲母が噛み合っており、長石が桃色の正長石と灰白色の斜長石からなる典型的な黒雲母花崗岩である。石材にみられる長石はもともと無色透明であったが、風化によって桃色や灰白色となっているのである。

石材とする石を得る場合に、転がっている石を拾う場合と、碎いたり割ったりして得る場合がある。ここでは石材を割って採石する場合について考えてみることにする。

前期古墳の石室材：畿内の古墳の石室材には玄武岩・石英斑岩・結晶片岩等が使用されている。これらの石材は板状で、鋭い角が残る石である。河原や海岸に転がるような角に込みがあり、表面が摩滅しているような石でない。先が尖った鉄棒のようなものを節理面に入れて、板状に剥がした石である。柏原市芝山の玄武岩や池田市付近の石英斑岩には板状節理、結晶片岩には片理が発達している。節理面や片理面を利用して剥がせば板石が採石できる。

香芝市高山の石切り場跡：石棺材に使用するために上部ドンズルボー層の火山疊凝灰岩を採石した跡である。得ようとする大きさの周囲に地層の層面に対して垂直に溝を掘り、得ようとする厚みの部分に層面に水平に楕円形の矢穴を孔けている。同質の石棺材と寸法から7世紀前半の時期と推定される。現在の石切場等で呼ばれている「すくい」の技法がとられている。

横穴式石室の石材：宇陀郡室生村の向坊古墳は、7世紀前半の時期に築造されたと推定される。玄室しか残存していないが、左右の壁石の前面には流紋岩質溶結凝灰岩（室生火山岩）の節理面に沿って楕円形の矢穴跡がある。石材の周囲は川原石様で、壁面が割った面である。矢穴は周囲にみられることから、川原に転がる石に周囲から矢を入れて割ったと考えられる。

舞台古墳の石材は角が円く、表面が滑らかで川原石様であるが、東大阪市石切の山中の尾根にあるイノラムキ古墳の石材は角が鋭く、表面が滑らかでない。後者の古墳は加工石を使用していることから終末期古墳とされていた。しかし、石材の表面には加工の跡がなく、節理面を剥がしたような面である。この古墳の北側には石室に使用されている石材と同質の方状節理がみられる黒雲母花崗岩が露出している。方状節理を利用して石材を剥がせば、一見加工石のような石材が得られる。露岩にある節理面を利用して石を採石している例と言えよう。同様の方法で石材を得たと推定される石室に奈良県当麻町竹内の三ツ塚遺跡の13号墳等がある。

凝灰岩製の塔：石塔には多層塔・五輪塔・宝篋印塔等がある。また、凝灰岩と言っても白杵

の石仏や付近の石造物は安山岩質溶結凝灰岩、室生火山岩は流紋岩質溶結凝灰岩、ドンズルボー層は流紋岩質凝灰岩、高砂市から加西市にかけてのいわゆる龍山石は流紋岩質溶結凝灰岩である。ここでは二上山系石材のドンズルボー層の凝灰岩の塔について述べる。多層塔は飛鳥の於美阿志神社・千早赤阪村の不本見神社・誉田八幡宮・久米寺・長谷寺等で見られる。五輪塔は当麻町の当麻墓地・八尾市の神宮寺墓地、宝篋印塔は富田林市の龍泉寺墓地・佐備墓地等でみられる。時期的には平安時代末～鎌倉時代中期とされ、殆どの石材は鹿谷寺跡北方から牡丹洞東方にかけての付近の石に似ている。この付近の崖には必要な大きさの石を採石した整跡が残る採石跡がみられる。

高野山町石の矢穴：高野山の町石は麓の慈尊院から山上の奥の院まで216基ある。文永二年（1265）に町石建立の願文がだされ、弘安八年（1285）にその供養がなされている。町石に残る銘では文永三年～文永十二年が殆どで、弘安四年が最後である。石材には黒雲母花崗岩や斑状黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩が使用され、採石地として讚岐の庵治町付近や神戸市御影付近の花崗岩が推定される。60町石がある矢立より山下にあたる77町石に、連続にあけられた矢穴跡が残る。この町石は文永五年（1268）の銘があり、庵治町付近の石である。近世城郭の築城時にみられる矢穴の素形が文永の時期の石に見られるのである。

花崗岩の採石：六麓荘の発掘現場を見学して、「採石した跡に石が転がらない」の言葉を実感した。採石時にできた石屑は埋められている。土器でも必要がなくなった井戸や溝などに投棄されている。「猫の糞」のように表面に出ていると危険なため埋めてしまったのであろう。現代人のように底が硬い靴をはいていなかったことや、作業時の転倒で石屑によるけがなどを考慮していたのであろう。発掘により出土した採石跡は、小規模であるが、氷河により削られたカール（圓谷）状の地形に似ている。採石するために石の周囲を掘り窪め、矢穴をあけて石を縦や横に割り、目的の石を運び出し、必要のない石はその場に置き、土で埋めたのであろう。奥山刻印群付近の尾根で、石材がなく、カール状の地形が沢山見られた。この地形は採石の跡であろう。六麓荘や奥山刻印群付近の石は長石が桃色と灰白色の黒雲母花崗岩である。

石材の採石：石材の採石については、節理面を利用して石材を剥がしていくことに始まり、7世紀になると矢穴が層理面や節理面に沿ってあけられ、矢を入れて割られるようになる。鎌倉時代になると節理がない均質な石に矢穴をあけて、目的とした大きさの石を採石するようになる。大正時代になると火薬を使用して石を割るようになる。技術的にみれば以上のようなである。

石材の石種と使用時期の関係についてみれば、矢穴の時期と密接な関係があるといえる。大和や河内では高野山の77町石の建立頃の時期になると二上山系凝灰岩製の石造物が見られなくなり、花崗岩製の石造物が多くなるといえよう。

（奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田 尚）

8. 石切丁場の調査と保存

-徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第12次調査の意義-

平成12年3月25日朝、私はインターネットの考古学ニュースのサイトで、芦屋市の大坂城採石場跡から鍛冶炉や作業小屋の遺構が発見されたことを知った。驚きと興奮を押さえきれないまま市教委に電話をかけ、4月1日に現地を見学させていただくこととなった。新年度開始の忙しい日にもかかわらず、御案内いただいた関係者の方にまず御礼を申し上げたい。

私は近年、金沢城・加賀藩前田家ーの石垣研究に取り組んでいる。城石垣は近世の土木技術を駆使して作られた巨大なモニュメントである。石垣研究のアプローチの仕方はいくつかあるが、考古学的には石材加工技術や石積み土留技術といった土木技術史、あるいは石垣普請の労働編成といった政治・経済史的な視点からの研究が重要と考える。その際、目前の城石垣のみを研究していくも成果は限られる。石垣普請の労働は周知のとおり、石材を採掘・加工する「石切丁場」、これを陸上・海上で運搬する「石引（曳）道」、そして築造の現場である「石垣丁場」のおおよそ三つの段階、場所で行われる。石垣技術の研究は各段階の技術内容、すなわち工程、道具、およびその使い方等を明らかにし、各「場」の遺構の実態と重ね合わせながら「石垣普請の風景」を描き出していかなければならない。

その意味で今回の建物跡や鍛冶遺構の発見は、従来の石切丁場の調査が、岡山県牛窓町前島における徳川期大坂城の残石調査など先駆的な仕事はあったものの、発掘を伴わない表面調査の制約が免れなかった中で、鮮やかに「石垣普請の風景」の一場面をよみがえらせ、今後の調査研究に確かな方向性を示した点で意義をもつ。芦屋市教委は早くから石切丁場跡の重要性を認識し、開発に対してもできる限りの緊急調査を実施して記録の保存に努めてきた。その努力なしに今回の発見はありえなかつたのではないか。

金沢城の石切丁場は、城の南東約8kmに位置する戸室山周辺にある。平成11年にはじめて採掘遺構が発見され、石材加工の特徴から寛永8年（1631）頃の丁場跡と分かった。昨年、その近辺で同時期の採掘場跡が複数確認され、現在、県教委金沢城研究調査室を中心に分布調査が進められている。各丁場毎に刻印種に違いがあり、天下普請の縮小版の様相を呈している。石材はまず母岩に小さな刻印を打ち、その後順次「矢」を入れて割り立っていく。打割の手順には一定のパターンが認められ、刻印石垣石が完成するまでの様子が手にとるように分かる。また、加工途中の石材を伴う遺構群の中に、人工的に造成された平坦面が付随する例がある。金沢城では石垣普請を担当した加賀藩穴生方の後藤家や穴太家の文書が多数あり、石切丁場の労働に関する記録（『戸室山初年号等留帳』『穴生勤方帳』等）の中には、鉄道具の修理（鍛冶仕事）や石工・穴生他の休憩宿泊場所として「仮小屋」のことが書かれている。いずれ、この遺構の確認調査をしたいと思っていた矢先の今回の発見であった。

全国の近世城郭が、地域の歴史文化の拠点、あるいは現首長の文化政策のシンボルとして保存・整備・復元が進む一方、石切丁場はまだまだ文化財としての認識が薄い。今回の事例が全

国の石切丁場の調査や保存を推進する大きなきっかけになることを願っている。

(東北芸術工科大学歴史遺産学科助教授 北野 博司)

9. 文献にみる近世初頭の採石場の変質と豊臣・徳川両大坂城

徳川大坂城が豊臣大坂城を再建といえるほど大改造したことは、これまでの石垣調査や発掘で判明しすでによく知られている。石垣にしても、自然石を利用した野づら積みから、切り出して加工された打ち込みハギ式石垣に変化した〔村川 1970, 岡本 1970・89〕。また、石を切り出す矢穴の分類からも、最も古いタイプは徳川大坂城のためのものとされ、豊臣大坂城は含まれていない〔藤川 1980a, 藤川・重川・望月 1992〕。技術史上からも、労働のありかたからも、両者は明確に異なっている。しかしこうした豊臣・徳川両大坂城の石垣の違いが、採石場や労働にどんな変化をもたらしたか、あるいは逆にどのような採石場運営があったからこそ、徳川大坂城の石垣構築が可能になったかについては、これまでほとんど考えられてこなかった。小稿では、豊臣・徳川両大坂城の間での採石場の変化とその背景を、文献史学の立場から考え、今回発見された採石遺構の意義を考えてみたい。

豊臣期から徳川期への採石場運営の変質 天正11年（1583）に大坂城の築城を始めた豊臣秀吉は、石を集めて奉行を付けたものを除いて取り次第とし、作業宿舎として石場に野陣を張れと指示し、天正14年には石場を先に占拠しても無効で、石を1町ほど動かして初めて所有権が発生することを規定した〔大國 1987b・92〕。ここでの採石は、切り出すというより、自然石の集積を想定している。自然石だけに石を移動させたり管理者をつけるという労働をもって、所有を認めた。もし事前に石場の設定を認めると、設定された石場内にある石と、移動させたり管理者を付けた石と、所有の根拠が二重に生じてしまう。これは当然、石場争論の原因になった。

豊臣大坂城の築城は、軍役としての性格が一層濃厚で、武士団が石を引く作業に多く従事していた。これは、織田信長が安土城築城で行ったことに倣ったもので〔大國 1987b〕、大坂城築城に関しては宣教師ルイス・フロイスが「(工事に従事したのは) 穴掘り人夫とか石工たちではなくして、日本の君侯や貴人たちであった」〔『日本史 豊臣秀吉編』八章〕と記している〔大國 1987b〕。石切りという特殊な技術が必要なのではなく、自然石を労力を使って集めるという軍役負担の色彩が濃いのである。武士は採石場であっても武具を所持していたため、争論はすぐ戦闘に発展する可能性をもっていた。惣無事令を発し「平和」の体現者としてふるまう秀吉は、紛争を抑止するために石の所有根拠を単純化する必要があった。従って石場も固定せず、石を運ぶという労働を加えることによって、石の所有権を認め、役を果たしたとしたのであった。石場を固定しない以上、宿舎についても移動の容易な野陣が求められた。

しかし徳川大坂城では、状況は一変している。既に知られるように、武士団を単位に、石場が固定された。例えば、加藤肥後守忠広の場合は「加藤肥後守石場 これより川南 ひかし」と刻印した傍示石を置いていた〔藤井 1991〕。また、池田光政家臣の伊木三十郎の石場を示す刻印も複数見つかっている〔古川 1992〕。この二種類の傍示石は領域設定の仕方にやや違いがあるものの〔大国 1992〕、石場領域をあらかじめ設定するという点は共通する。要するに、石を移動させる前に、それぞれの武士団の採石場の区画を設定し、そのあと、石を切り出すのであった。当時の領主の関心は高い値段で売買される「つらよき石を割る」ことであり（慶長15年＝1610＝閏2月7日付細川忠興書状「細川家記」、〔大国 1992〕）、そのためには、石を移動させて初めて所有を主張できるような仕組みは合理性を欠く。むしろあらかじめ領域を設定し、その中にある石を最も適切な方法で加工することで、よき石を生み出す方がふさわしい。その結果、採石集団は一定期間特定の場所で、寝泊まりをしながら作業をすることになる。このため、石場を決めたら、小屋掛けをするのが普通になる（慶長17年7月24日付毛利秀就条々『毛利家文書』146）。採石場で一定期間の生活を行うことになるのである。今回発見された作業小屋はこのような歴史的な段階に即した構成をもっている。特に注目されるのは、工具の製作・修繕を行ったと見られる鍛冶炉跡まで発掘されたことであろう（本書91～95頁）。

石垣の需要の変化が、採石場の運営もそこで労働のありかたも採石労働者の生活も一変させたのである。

徳川政権下の武士団による採石と地域 これまでの刻印分布調査の成果より、東六甲採石場岩ヶ平刻印群の場合、各藩の採石場の領域設定が地図上に落とせるまでに至っている（本書34頁第23図）。その設定方法は、尾根を境界に、谷筋に沿って上から領域を設定しそれぞの武士団が採石場とするというやりかたである。この方法で採石しようとすれば、石を海岸へ引く過程で他藩の領域を通らなくてはならない。それでも紛争なく石を切り出せる集団へ、徳川政権下の武士団は変質したといえよう。この変質は、豊臣政権下の私戦の禁止を通じて進行した。

もうひとつ重要なことに、太閤検地が本格的に実施され、村切りが実施されたことをあげなくてはならない。天正18年（1590）に秀吉が浅野長政に宛てた検地に関する朱印状には「山の奥、海は檣・櫂のつづき候まで」と命じている。土地はすべて天下に属するという宣言であり、村切りにより山野の帰属と境界が一応定められた。武士団の採石場の一時的な占拠が行われても地域に混乱が生じない社会に成熟したのである。中世末、六甲山を巡っては、領主が交替するたびごとに境界争論が再発したが、採石場の設定を経ても新たな紛争が生じなかったことは、地域に境界意識が浸透したともいえよう。

（神戸深江生活文化史料館副館長 大国 正美）

10. 徳川大坂城再築に伴う採石場遺跡発掘調査への期待と提言

(1) 徳川大坂城再築に伴う採石場遺跡

徳川期大坂城の採石場跡は、現地調査により次の箇所が判明している。

京都府 加茂・笠置方面、伏見廃城石

大阪府 生駒山系

兵庫県 六甲山系

岡山県 前島・犬島・北木島・六口島・下津井・宇野方面

香川県 小豆島・豊島・塩飽諸島（櫃石島・与島・本島・広島）・庵治

山口県 大津島

これらの採石場跡調査において、露岩・地表面に露出する刻印石・矢穴石等の観察だけにとどまっていた。しかし芦屋市教育委員会では、過去何回かの発掘調査を実施され、その都度調査現場を見学している。特に今回は広範囲にわたる発掘調査であり、新しい知見を得たことに感謝している。

芦屋市教育委員会とのつながりは、1969年3月に藤川祐作氏らの「芦の芽グループ」と連絡がつき、以後、同グループから六甲採石場跡の資料の提供をうけるとともに、合同調査も数回実施したことに基因している。

(2) 採石場遺跡発掘調査への期待と提言

数年前、某大手ゼネコンが大坂城築城費用を試算したところ、堀・石垣等に関する土木（普請）費用に総費用の70%強、天守・櫓・門等の建築関係（作事）に30%弱が必要であると発表したことがある。この結果からみても、石垣関係の採石から構築にいたるまでの作業が如何に重要であり、多額の出費が必要であるかが判明する。

一般の風潮としては、“城”イコール“天守閣”的感覚が最も強く、石垣ないしは採石場跡への関心にいたっては、その度合いは非常に低いものではないだろうか。

六甲山系と小豆島・豊島を除く、各地の採石場跡の露岩・刻印石・矢穴石については、地元教育委員会では、関心は充分あるように見受けられるが、正式に埋蔵文化財として指定・登録されていないのが実情のようである。機会がある毎に埋蔵文化財として、保存するように口頭で希望を伝えているが、実現に程遠いようである。これらの採石場跡は周辺に人家がなく、市街化開発の進まない地域に存在することに基因しているのではないかと考えられる。

今回の発掘調査で、柱穴群・鍛冶炉跡・黒色灰層の検出と鉄滓・輪羽口片の一連の採集に成功したことは、有機的な遺構の発見である。現在までの築城史研究会の採石場跡調査は、地表観察のみにとどまっていたので、例のない画期的な成果でもある。予測はしていたが、発掘調査を実施しなければ判明しない遺構で、今後の調査に新しい課題を与えられたものである。

元和六年（1620）から寛永五年（1628）までの大阪城再築時における資料の一部分に、次のような内容のものがある。

一、御普請道具奉行 赤木伝右衛門 ⁽¹⁾

一、式拾六匁 石壱ッ分、西宮ニテ石堀ハリ鉄道具入目共ニ、⁽²⁾

壱万千七百七拾六人 万道具番諸奉行夫数 ⁽³⁾

諸道具ノ御奉行 不破平大夫 中山左次右エ門 ⁽⁴⁾

これらの資料は採石場関係（構築現場も含む）の事項を抽象的に表現しているにすぎないが、石材採集・加工には必然的に鍛冶場とその付属設備が存在してこそ、総合的に機能が発揮されるものである。

大阪城石垣修復工事の折に栗石の中より「ノミ」が出土したことがある。今後の採石場発掘調査でも、このような事態が生じる可能性は皆無とはいえない。

昭和59年から実施された豊臣大阪城本丸詰の丸櫓台発掘調査では、隅石に難波宮の遺物に比定できる二重同心円形柱座礎石等が転用されていた。

また、旧大阪市中央体育館敷地内で、前期難波宮の石組み溝が検出された。この両所に使用されていた石材は、六甲山系のものであることに注目している。即ち既に700年代には六甲山系において採石が行われていた事實を強調したい。

（築城史研究会代表 藤井 重夫）

(1) 「大阪御普請場へ被參候覺」 元和六年三月五日付（若狭小浜 京極若狭守の文書） 大坂城天守閣蔵

(2) 大坂石垣ニ野村大学組銀子入増覺」（石数五十二入増に關わる） 元和六年正月十三日付 黒田家関係
『大日本史料第十二篇之三十一』

(3) 「塙龜御丁場ニ而御役人御著到前指引目録之事」 元和六年十一月十九日付 細川家関係 『熊本懸史料 近世篇第三』

(4) 「寛永五年大阪御普請御役高御侍帳之内」 細川家関係 『熊本懸史料 近世篇第三』

VIII. まとめ

- 今後の採石場調査に向けて -

時は戦国時代の終盤期、16世紀も後半を迎えると、戦国諸大名の城は畝状堅堀群の築造や折形虎口の設置など急激な防衛要素の発達がみられるようになる。

石垣・瓦葺きと天守などの礎石建物の3要素に代表される、いわゆる「織豊系城郭」の波及であるが〔中井 1990〕、「高石垣」の導入という観点に絞れば、織田信長築城の近江・安土城が初現であり〔中井 1996〕、戦国期段階の専ら切土による「切岸」を転換した程度の「石積み」石垣とは明確に区分できる。戦国最盛期段階の石積みタイプ石垣の背面の栗石埋め込みは、一般的に幅がみられず弱く、他方、高石垣の裏込め栗石は堅牢であり、重量物である礎石建物・土壁造重層建築の施工を可能としたのである。こうした高石垣の城に達した織豊系城郭は、豊臣秀吉の文禄・慶長の役を契機に九州・関東・東北地方に急速に全国伝播するようであるが〔千田他共編 1996〕、高石垣を積む経験が、各大名の労働提供により完成した肥前・名護屋城跡で技術情報の一元化が達成できたとされる点は、当時の石垣のテクノロジーの交流、ひいては技術者の接触という視点から興味深い。

このような経緯の下、近世城郭においては高石垣の構築が重要な構成要素の一つとしてクローズアップされるが、天下普請の徳川大坂城は、豊臣大坂城の石垣工事手法と比較すれば、さらなる技術と石垣思想の飛躍があったわけであり、その威容はまさに「戦う城」から「見せるための城」へと変貌をとげたことを如実に物語っている〔中井 1990〕。

近世城郭、わけても元和6年(1620)から着手された徳川幕府による大坂城の修築は、実態として石垣・建物・繩張りのすべてを新装・拡大するものであり、幕藩体制下に安定をみる新しい城郭史の幕明けを飾るものでもある。

石垣の成立、そしてその変化は、室町時代から江戸時代の初期にかけての城の大変革、政治体制の変化と同軌の動きといえ、天下人の居城性、拠点性が「土の城」から「石の城」への動き、換言すれば「見せる城」への転換を促し、「軍事拠点と同時に天下統治の拠点そのものとしての特徴」となっている〔永原 2002〕。その特徴は明らかに日々進化しており、天下を統一した者の権力と権威が、安土城・大坂城・江戸城に一貫したものであると共に、戦国期の城郭からの距離をさらに一層増すものであった。

石垣はこの歴史的変化の過程で安定性を獲得し、高度な技術を駆使して堅牢なものとなり、加えて美観さえ追求される方向で進化した。築城分担を西国64家の諸大名に賦課した天下普請の徳川大坂城は、さらに豊臣大坂城を完全否定するまでに新しい装いで出現し、一方で工事を担った西国の外様大名は経済力の大幅な弱体化をしいられたのであった。

これに先駆けて元和元年(1615)に江戸幕府により命ぜられた一国一城令は、支城および脇城

の一齊破却を強く指示したものであり、加えて「新儀之城郭構営禁止」(『武家諸法度』)は、諸大名の階層について、城をもつもたないで明確化し、各大名の居城の一元化、固定化を促進したものであり、その厳しい適用のみられた西国諸大名は、幕藩体制下、二重三重の制約と苦渋をしいられたのである。

中世から近世への日本歴史の大きなうねりの中で、天下無双の豊臣大坂城があり、また、それの改造を企てた徳川大坂城が存在したのであって、そうした城郭の高石垣は巨大な記念物を支えた視覚に訴えた遺構群である。その石垣は一つ一つの巨石から成り立ち、瀬戸内海地域に点在する石材採石場から供給されたものであり、築城の歴史は城から遙か遠隔の採石場をもまさに巻き込み、その動きを共有したものといえる。

しかし、往時の政治的モニュメントの最も基礎の基礎である石垣用石材を調達したいわゆる「石切場」の調査・研究は、華々しい城郭の調査・研究の陰となって長い間地味な分布調査と産状を記録するだけの計測調査が行われてきた程度にすぎず、客観的・考古学的な資料記録づくりを基盤に据えた発掘調査の導入は大変遅れてきたのである。

※ ※ ※

こうした状況下、本市では1980年代に発掘調査現場での矢穴石の検出が相づぎ、90年代には採石遺構を意識した発掘調査を行い始めており、その経過に関しては、第Ⅰ章序説において紹介したとおりである。その報告書もまだ若干数ではあるものの刊行しつつあり、今般事前調査を終え、報告し終えた当該地の調査は、おそらく今後の採石地調査研究史の上に大きなエポックをなすものといえよう。いまその成果を箇条書にし、まとめとして集約するとともに、残された課題についてもふれようと思う。

- ① 大坂夏の陣が終わってのち入城した徳川幕府が、元和6年(1620)以降、西国64大名を総動員した天下普請により大再築した徳川大坂城の石垣採石場の一角の発掘調査を行い、これまでにない実りある成果がもたらされた。
- ② その再築に際し要した石垣用石材は、小豆島を始め塩飽諸島・笠岡諸島・前島・犬島・宇野・下津井・六口島・大津島など、中部瀬戸内の島々や北岸の花崗岩地帯の広域にわたる石材産出地から供給したが、その半数近くは六甲山系東部の山中から採っていたと思われる。六甲花崗岩を対象とした東六甲採石場が東西約6.5km、南北約2kmの範囲に広がっており、今回の調査地点は、そのうちの岩ヶ平刻印群の範囲に入る。
- ③ 調査地は、岩ヶ平刻印群の北部に位置しており、本市がこれまで発掘調査を実施してきた場所としても市域では最北端の場所となる。
- ④ 徳川大坂城東六甲採石場の中で、芦屋市教育委員会が発掘調査を実施した地点のうち、今回の調査箇所は最も広い発掘面積を占めており、工事損壊部の大半約1,200m²を発掘調査した。その結果、17世紀初頭の採石関係の遺構・遺物が数多く出土し、これまでの調査成果を大きく凌ぐ発掘結果が得られた。
- ⑤ 出土遺構の内訳は、採石遺構5ヶ所(I~V)、刻印石1石、準調整石をはじめとする

割石30個、採石関連の建物跡1棟、鍛冶炉3基を数える。

- ⑥ 出土遺物は、遺跡の性格上僅かであるが、最小限必要と思われた資料が出揃った感がある。その内訳は、土器・陶器・錢貨（絵銭）・輔羽口・鉄片・鉄滓などである。土器には、大坂城再築期からはるかに先行する7世紀後半の須恵器杯蓋・壺の破片や土師器片などがあり、付近での後・終末期古墳の存在を示唆する。陶器は採石遺構IVに伴った備前焼擂鉢片・柱穴群南部遺構面で検出された丹波焼擂鉢片があり、いずれも遺構の年代を考える上に重要であるのみならず、実年代が判明するため、これまで構築されてきた土器の年代や編年を再考する上にも貴重な資料を得たといえる。
- ⑦ 遺物の中でも鍛冶関係の資料は予期せぬ収穫物といえ、自然科学分析を含む専門調査を進めた結果、発掘終了段階では予想だにし得なかった鍛冶工程・作業システムの復元が可能となった。これらは鍛冶炉跡内および近辺・西に隣接する採石遺構Iから出土した多数の鉄滓や微細遺物で、轆の羽口なども伴っていた。
- ⑧ 以上の⑤⑥⑦は、調査区内で互いに有機的関係をもって出土しており、採石場で働いた名もない近世石工、および労働を提供したであろう地域の住民の、ビジュアルな作業光景がある程度復元可能となった意義は大きい。これらの遺構群と伴出遺物は、従来、刻印石と関係石材、石材採掘坑などにはば限られていた採石場遺跡の姿・イメージを大きく塗り替えるものであり、これまで行ってきた調査の方法にも大きく抜本的な見直しを迫るものといえよう。
- ⑨ 以上、本地点の発掘調査は、17世紀初めのごく短期間（約10年）という実年代の判明する大坂城関係の採石場が、発掘によって詳しく解明された事例として初めての資料を提供しており、特筆に値する価値ある成果が導き出されたものと評価し得る。

※ ※ ※

採石の場は、高石垣を誇る近世城郭の築城の出発点であり、かつその構築工事の底辺とも言うべき社会下層民の労働過程を、物的資料に基づき具体的に指し示す遺跡である。工役者の人数は想像の域を出ないが、西日本各地からおそらく数千人規模の莫大な人々が東六甲山中の土地に集まり、地元農民層とも提携して、きわめて短期の間に大規模な採石活動を果たした跡といえる。当然のこととして、採石場跡の調査・研究に費したこの30数年間、飯場・作業場跡に類する遺構の遺存は十二分に予測されてきたところとはいえ、ここにきてようやく実際の発掘調査を通じて検出された意義は大きい。

今次の調査では、一定の発掘面積を一応確保することができ、かねてより予測してきた工具や生活道具などの出土にも期待が寄せられてきたが、その展望を裏づけるかのように一連の遺構と遺物が比較的判りやすい形で発掘されたといえよう。

これまでともすれば、採石場跡などの生産遺跡は、不定形かつ規模格差のみられる石材採掘坑以外の顕著な遺構や大量の遺物に恵まれることがなく、その歴史的意義や社会的意味は薄く軽く受け取られがちであった。本市が発掘調査の実施に漕ぎつけるまでにも多くの軒余曲折が

あり、国庫補助事業の手立てを得るまでにも相当数の時間を費やしている。今回の発掘調査成果は、それら多くの障害や制約をも払拭するに足る内容をもっているといえるだろう。

※ ※ ※

さらに、今次の調査地点を起点として、岩ヶ平刻印群の北半部においては、北部九州・唐津藩寺澤家の採石領域がおよそ判明し、同時に若狭小浜藩京極家(9万2千石)、因伯鳥取藩池田家(32万石)、出雲松江藩堀尾家(23万5千石)、肥後熊本藩加藤家(約73万石)などの所用刻印と採石範囲がおよそ明らかとなりつつある〔森岡・古川 2002a〕。本調査で検出した遺構や遺物がミクロな世界の解明とするなら、大坂城再築に伴う採石活動における具体的な採石藩と採石領域の解明は、まさにマクロな部分の話であり、近世大坂城の歴史のうねりにダイレクトにリンクする成果ともいえる。

これをもう一段具体的に述べれば、今回の調査地では個別人物名までは判明しないものの、1620年代という限定期間に内に、九州の唐津から寺澤家関係者が芦屋の山中へ実際にやって来て採石作業をしていたことが判明した訳である。さらに今後、大坂城において六甲産花崗岩を使用して唐津藩が築いた石垣を調査することができれば、唐津-芦屋-大坂を結んだ人と物(石)の動きが、立体的なイメージとして蘇ってくるのではなかろうか。同様のことは、小浜藩・鳥取藩・松江藩・熊本藩をはじめ、表2(26頁)に示した奥山刻印群の福井藩・長州藩・大村藩や、城山刻印群の佐土原藩・臼杵藩・福知山藩・甲山・越木岩刻印群の平戸藩・久留米藩・備中松山藩等についてもいえる。これらは、具体的な採石藩と採石地が判明し、今後の調査でより詳細な採石状況や搬出ルートが明らかとなってくることにより、文献史料だけでは解らなかった徳川幕府による大坂城再築工事の内容や実態が、より説得力をもって見えてくるであろうことはいうまでもない。

しかしそれだけではなく、それぞれの採石藩の地元における動向とリンクさせることにより、史料の少ない近世初期の地域史に、まったく新たな視点からの光をあてる可能性を持っているのではなかろうか。特に、本調査地で採石した唐津藩寺澤家をはじめとして、小浜藩京極家・鳥取藩池田家・松江藩堀尾家・熊本藩加藤家・備中松山藩池田家等々、近世初期・前期の段階で改易や転封となった藩(大名家)に関しては、それぞれの地元に史料がほとんど残っていない場合が多く、地方史叙述の中でもその部分の記述が極めて貧弱かつ抽象的であることが多い。あえて極論すれば、空白に近いそれぞれの地域史の一部を、芦屋の資料が多少なりとも明らかにする可能性があるのではなかろうか。

言い換えれば、多数の西国諸藩が参加して築いた徳川大坂城の石垣調査や、石垣築造のために必要な膨大な石材を供給した採石場の調査は、それぞれの石材に刻まれた刻印の詳細な検討を重ねた上で、その主体者、つまり石材の採石・運搬者(藩)や石垣築造者(藩)を特定することにより、主体者(藩・大名家)やそれが帰属する地域の歴史に、新たな光をあてることとなるのである。

一般的に遺跡調査は、極めて具体的な遺構・遺物を対象としながらも、その遺構・遺物が形

成された実年代や、その形成の目的、またそれにかかわった人間群の性格などを明らかにすることは、考古学的方法の原理からして極めて難しい。それに対して今回の調査地では「1620年代という限定期間に内に、遠く肥前唐津からやってきた多数の人々が芦屋の山中へ入り、幕府の指示を得て唐津藩の占有領域を設定。そのうえで、宿营地や飯場、作業小屋や鍛冶炉などを現地に設け、自己完結的な作業によって大量の石材を切り出した。さらにその石材を自ら大坂城まで運んで、石垣の担当丁場を築いた。」という、極めて具体的な内容がわかるのである。このような遺跡はめったにあるものではなかろう。また、周辺の採石場に関して「肥前唐津」を肥後熊本や出雲松江・若狭小浜・越前福井等々に置き換えて同じことである。このように考えることにより、徳川大坂城採石場を埋蔵文化財として位置づけ調査を進めることの意義が、ますます大きなものとして認識されるのではなかろうか。

※ ※ ※

こうしたことを踏まえ、本書第Ⅷ章では、僅かな紙数ではあるものの、多忙な中、各分野の専門の研究者に、とりわけ現地を踏査された生のご意見も混えて考察の足懸りとなる一文を執筆して頂いた。また、第Ⅵ章では、資料の客観的把握を前提として自然科学分析の諸成果もとり入れた。限りある発掘調査経費の中では原稿料すら組むことはできなかったが、堆積学・治金学・文献史学・鉄製品研究・土器研究・地質岩石学研究・採石場研究等の、多くの分野の研究者の玉稿を早い時期に拝受することができ、本書に収載できたことは、当該発掘調査を担当した者として慶びにたえない。

※ ※ ※

調査担当者のうち、主として現場を担当し本書の編集にもあたった古川は、市内歴史研究団体芦の芽グループが採石場調査を開始した昭和44年以来、継続的に調査に関わってきた。しかし当初は十代の高校生・大学生であったこともあり、次々と見つかる刻印石がおもしろかっただけかもしれない、今から思えば刻印石や採石場の歴史的意義や学問的可能性など、どの程度認識していたか甚だ疑わしい。今日の状況とくらべると隔世の感がある。

今回の調査と報告書の刊行を通して、徳川大坂城東六甲採石場の調査・研究が新しい段階へとステップしたことは確実である。しかし、本書はその到達点を示すものではなく、これから進めていくべき採石場の発掘調査と遺跡保護の原点として、常々フィードバックされるべき存在であることを強調して掲筆する。

（森岡・古川）

参考文献一覧

- 岩ヶ平刻印群関係 刊本 (行頭の番号は38頁表5の文献番号に対応)
- ① 藤川祐作 1976 「八十刻印群の復元－徳川大坂城の研究3」「わだち」12号 わだち編集部 (孔版)
 - ② 藤川祐作 1979 「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会 (同書収録の「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」の付論として収載)
 - ③ 森岡秀人編 1980 「芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 (第1分冊)」<芦屋市文化財調査報告第12集>芦屋市教育委員会
 - ④ 藤川祐作 1982 「徳川大坂城 東六甲採石場 (西宮市所在)」「西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」<文化財資料23号> 西宮市教育委員会
 - ⑤ 森岡秀人編 1986 「埋蔵文化財メモリアル'80~'85」<芦屋市文化財調査報告第14集> 芦屋市教育委員会
 - ⑥ 森岡秀人 1987a 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第43号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』 兵庫県教育委員会
 - ⑦ 古川久雄 1988 「徳川大坂城の採石場」「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会
 - ⑧ 森岡秀人 1988a 「65.東六甲採石場 (岩ヶ平刻印群)」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度」 兵庫県教育委員会
 - ⑨ 森岡秀人・和田秀寿・古川久雄ほか 1990 「八十塚岩ヶ平支群第10号墳の調査－古墳損壊にともなう確認調査－」<芦屋市文化財調査報告第20集> 芦屋市教育委員会
 - ⑩ 森岡秀人・白谷朋世 1992 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳の発掘調査」「平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺跡ほか発掘調査概要報告書 月若遺跡第12次地点 月若遺跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳」<芦屋市文化財調査報告第22集> 芦屋市教育委員会
 - ⑪ 古川久雄 1992 「岩ヶ平刻印群における池田家筆頭家老人名刺印の発見」「櫻桜」65号 芦の芽グループ
 - ⑫ 森岡秀人・和田秀寿・白谷朋世編 1993 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第24集> 芦屋市教育委員会
 - ⑬ 森岡秀人・白谷朋世他 1994 「平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町94番地 (八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場)」<芦屋市文化財調査報告第25集> 芦屋市教育委員会
 - ⑭ 古川久雄編 1999 「兵庫県芦屋市・西宮市所在 岩ヶ平刻印群 刻印石資料集」 挿陽文化財調査研究所
 - ⑮ 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図・利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第40集> 芦屋市教育委員会
 - ⑯ 森岡秀人・古川久雄 2002a 「平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場Ⅱ 岩ヶ平刻印群 (第11次) 発掘調査報告書」<芦屋市文化財調査報告第42集> 芦屋市教育委員会

- 岩ヶ平刻印群関係 芦屋市教育委員会発行実績報告書 (行頭の番号は38頁表5の文献番号に対応)
- (1) 森岡秀人・古川久雄 1989 「徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群の調査－芦屋市六麓荘町113番地1・2所在 (平成元年度埋蔵文化財調査概要19)」<高田邸>
 - (2) 和田秀寿 1993a 「六麓荘町79番地試掘調査略報」<巽邸>
 - (3) 和田秀寿 1993b 「六麓荘町2番地試掘調査略報」
 - (4) 森岡秀人・白谷朋世 1993 「六麓荘町94番地埋蔵文化財分布調査略報」
 - (5) 竹村忠洋 1998a 「平成9年度 岩ヶ平刻印群 発掘調査実績報告書」<真鍋邸>
 - (6) 竹村忠洋 1998b 「平成9年度 岩ヶ平刻印群 発掘調査実績報告書」<比屋根邸>
 - (7) 竹村忠洋・古川久雄 1999 「平成11年度 岩ヶ平刻印群 (芦屋学園) 発掘調査実績報告書」
 - (8) 竹村忠洋 2000 「平成11年度国庫補助事業 岩ヶ平刻印群(原田邸) 発掘調査実績報告書－震災復興調査」
 - (9) 竹村忠洋 2001 「岩ヶ平刻印群 (国光邸) 確認調査概要報告書」
 - (10) 古川久雄・森岡秀人 2001 「岩ヶ平刻印群 第11次 (国光邸) 発掘調査実績報告書」

(1) 森岡秀人・古川久雄 2002b 「芦屋市六郷荘浄水場高区配水池（水道施設）築造工事に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書－徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第12次調査の概要－」

徳川大坂城東六甲採石場関係 刊本

- 村川行弘 1962 「大坂城と芦屋」<芦屋市文化財調査報告第2集> 芦屋市教育委員会
芦の芽グループ 文化財パトロール委員会・文化財問題研究会編 1969 「昭和43年度芦屋市文化財パトロール調査報告 芦屋及び西宮の刻印石調査資料」<芦の芽資料編第2集> 芦の芽グループ（孔版）
藤川祐作 1969 「大坂築城石と芦屋」『芦の芽』16号 芦の芽グループ（孔版）
村川行弘 1970 「大坂城の謎」 学生社
有坂隆道・村川行弘 1971 「大坂城と芦屋」「新修芦屋市史」本篇 芦屋市役所
藤川祐作 1972 「摂津大坂城（六）－芦屋山中の採石場－」<城と陣屋65号> 日本古城友の会
藤川祐作 1973 「刻印への問い合わせ」『芦の芽』24号 芦の芽グループ（孔版）
岩本昌三・藤川祐作 1979 「大坂城と採石地芦屋の刻印石」「芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－」 芦屋市教育委員会
藤川祐作 1980a 「奥山刻印群」「芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）」<芦屋市文化財調査報告第12集> 芦屋市教育委員会
西宮市教育委員会編 1982 「西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表」<文化財資料23号> 西宮市教育委員会
藤川祐作 1985a 「摂津大坂城（十）－徳川大坂城東六甲採石場甲山刻印群－」<城と陣屋168号> 日本古城友の会
藤川祐作 1985b 「徳川大坂城・東六甲採石場採石場の西限の再考」「郷土史料室だより」'85 夏・ゆり号 芦屋市教育委員会
藤川祐作 1985c 「大坂城と採石場」「鹿児」111号 加古川史学会
森岡秀人編 1988 「芦屋市埋蔵文化財孔蓋地分布地図・利用の手引き」<芦屋市文化財調査報告第16集> 芦屋市教育委員会
藤川祐作 1988 「「武庫郡誌」にみられる大坂城石材についての再検討」「歴史研究手帖」2 神戸歴史研究会（神戸灘江生活文化史料館内）
藤川祐作 1990 「西宮市西平町遺存の分銅刻印石について」「蘆槌」第61号 芦の芽グループ
藤川祐作 1991 「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地－芦屋市呉川町発見の新資料を中心に－」「歴史と神戸」第168号 神戸史学会
森岡秀人・田口泰久 1991 「芦屋と大阪城」「芦屋の歴史と文化財－歴史資料展示室常設展示図録－」 芦屋市立美術博物館
芦屋市立美術博物館編 1991a 「時を結ぶ」「館案内リーフレット」 芦屋市立美術博物館
芦屋市立美術博物館編 1991b 「時を結ぶ」「要覧」 芦屋市立美術博物館
芦屋市立美術博物館編 1991c 「オープン展示・モニュメント」「芦屋の歴史と文化財－歴史資料展示室常設展示図録－」（前出）
大国正美 1992 「近世初期の城普請における採石－“伊木三十郎”刻印石の意義をめぐって－」「蘆槌」65号 芦の芽グループ
森岡秀人・古川久雄 1992 「芦屋市立美術博物館野外歴史資料展示における近世考古資料の一例－兵庫県芦屋市呉川町出土の大坂城再築関係石材について－」「阡陵」（関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集） 関西大学
森岡秀人 1993a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(1)」「なりひら」第13号 芦屋市立美術博物館
森岡秀人 1994a 「伝芦屋廃寺の塔心礎(1)」「なりひら」第14号 芦屋市立美術博物館
松尾政人 1994 「《速報》呉川遺跡の試掘調査(1)」「のじぎく文化財だより」第30号 勤のじぎく文化財保護研究会
東 靖子 1994 「《速報》呉川遺跡の発掘調査(1)」「のじぎく文化財だより」第33号 勤のじぎく文化財保護

研究財團

- 芦屋市教育委員会編 1997 「観覧のてびき 最新発掘!考古学からみた芦屋展 -'95~'97震災復興調査の成果」
- 森岡秀人・古川久雄 1998 「徳川大坂城東六甲採石場 I - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群 K 地区内の事前発掘調査 -」<芦屋市文化財調査報告第31集> 芦屋市教育委員会
- 古川久雄 1998 「奥山刻印群 K 地区内における毛利氏所用刻印の分布と意義」「徳川大坂城東六甲採石場 I - 芦屋墓園拡張工事に伴う奥山刻印群 K 地区内の事前発掘調査 -」<芦屋市文化財調査報告第31集> 芦屋市教育委員会
- 芦屋市広報課編 2000 「芦屋2000年、土中からのプレゼント -考古最新出土品10選- 毛利氏とも縁深き奥山の採石場、巨石に刻まれた初めての人名刻印」「広報あしや」802号 芦屋市
- 西宮市教育委員会編 2001 「西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表 第七版(南部)」<西宮市文化財資料第45号> 西宮市教育委員会
- 村川行弘 2002 「大坂城の謎」<改訂新版> 学生社
- 森岡秀人 2002 「はじめに」「平成13年度国庫補助事業 徳川大坂城東六甲採石場 II 岩ヶ平刻印群(第11次)発掘調査報告書」(前出)
- 芦屋市広報課編 2002a 「21世紀 古代史発掘 in 芦屋 - 平成13年埋蔵文化財調査のあらまし -」「広報あしや」837号 芦屋市
- 芦屋市広報課編 2002b 「教育のページ 市内埋蔵文化財調査の状況 - 埋蔵文化財の保護と発掘調査にご協力を -」「広報あしや」840号
- 芦屋市広報課編 2002c 「刻印石の謎を解く - 発掘調査からわかる大坂城と芦屋の歴史 -」「広報あしや」855号 芦屋市

徳川大坂城東六甲採石場関係 実績報告・発表資料等

- 芦の芽グループ文化財パトロール委員会・文化財問題研究会・刻印調査研究会編 1968~1973 「刻印調査資料」1~32号 芦の芽グループ(青刷)
- 藤川祐作 1980b 「東六甲採石場甲山刻印群 C 地区調査報告」「奇形猿の叫び - 芦屋文化」4 茅渟歴史学
- 森岡秀人 1990a 「芦屋市松ノ内町56番、58番、60番 平見秀市氏所有地の刻印調査」(終了報告) 芦屋市教育委員会
- 藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1992 「芦屋墓園整備拡張に係る埋蔵文化財調査実績報告」芦の芽グループ
- 藤川祐作・重川忠廣・望月浩 1993 「芦屋墓園整備拡張に係る第2次埋蔵文化財調査実績報告」芦の芽グループ
- 古川久雄 1993 「徳川大坂城東六甲採石場 - 調査研究25年の歩みと課題 -」(考古学研究会関西例会第65回研究会発表資料) 考古学研究会
- 森岡秀人 1993b 「芦屋市與川遺跡埋蔵文化財損壊確認調査報告」芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1994b 「芦屋市中央道敷設事業に伴う吳川遺跡 B 地点工事立会調査終了報告」芦屋市教育委員会

徳川大坂城と築城石

- 岡本良一 1970 「大坂城」(岩波新書739) 岩波書店
- 志村 清 1970 「大坂城今昔」(日本古城友の会編) 日本城郭資料出版会
- 藤川祐作 1974a 「室津港内から引き揚げられた角石 2石」「わだち」12号 わだち編集部(孔版)
- 藤川祐作 1974b 「落石」「芦の芽」26号 芦の芽グループ(孔版)
- 藤井重夫 1977 「大坂城石垣調査報告書 其一」築城史研究会
- 内田九州男・渡辺武・藤井重夫・中村博司・長山雅一他 1997 「徳川時代大坂城外郭間連石垣遺構調査報告 - 日本経済新聞大阪本社新社屋建設に伴う旧大和川河口付近護岸石垣遺構の調査」徳川時代大坂城外郭間連石垣遺構発掘調査団(難波宮址顕彰会内)
- 内海町教育委員会編 1979 「史跡 大坂城石垣石切丁場跡 保存管理計画報告書」内海町教育委員会編
- 中村博司 1979 「岡山県邑久郡牛窓前島所在大坂城石切丁場遺跡報告」「大坂城天守閣紀要」第7号別冊

大坂城天守閣

- 藤井重夫 1982 「大坂城石垣符号について」『大坂城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
内田九州男 1982 「徳川期大坂城再築工事の経過について」『大坂城の諸研究』(日本城郭史研究叢書8) 名著出版
藤井重夫 1983 「摂津大坂城(七)・生駒山系の石切場についてー」<城と陣屋158号> 日本古城友の会
藤井重夫 1984 「摂津大坂城(八)・主として瀬戸内六口島・櫃石島の採石場跡調査報告」<城と陣屋161号> 日本古城友の会
大国正美 1987a 「大坂城採石に係わる秀吉の禁制について」『蘆棚』53号 芦の芽グループ
大国正美 1987b 「近世初頭の“石工”と“石持”一役負担と身分をめぐって」『歴史と神戸』140号 神戸史学会
藤井重夫 1989 「石からみた大坂城と城下町」『よみがえる中世(2) - 本願寺から天下へ - 大坂』 平凡社
高橋美久二 1990 「木津川河川敷の大坂城残石」『山城郷上資料館報』第8号 京都府立山城郷土資料館
藤井重夫 1991 「“加賀肥後守石場”的刻印石」『蘆棚』63号 芦の芽グループ
藤井重夫 1994 「旧大和川河口付近の大坂城外郭関連石垣について」『大阪市文化財論集』 財団法人
大阪市文化財協会
中村博司 1997 「徳川期大坂城石垣築造について」『建設文化としての大坂城石垣築造における土木施工技術の土木史的調査研究』(課題番号07455206 平成7・8年度文部省科学研究〔基盤研究(B)〕研究成果報告書) 建設文化としての大坂城石垣築造に関する総合研究会(研究代表者 天野光二)
中村博司・森 翼・豆谷浩之 1997 「岡山県邑久郡牛窓町前島における徳川期大坂城残石の調査」『建設文化としての大坂城石垣築造における土木施工技術の土木史的調査研究』(前出)
北川 央・跡部 信 1997 「鳥取県立博物館所蔵『池田家文庫』中の大坂城普請関係史料について」『建設文化としての大坂城石垣築造における土木施工技術の土木史的調査研究』(前出)
藤井重夫 1998 「摂津大坂城(14) - 寛永元年 毛利家助役の動向」<城と陣屋226号> 日本古城友の会

豊臣大坂城と織豊城郭、及び城郭石垣

- 小野 清 1899 「大坂城誌」中
桜井成広 1970 「豊臣秀吉の居城 大阪城編」 日本城郭資料出版会
渡辺武・内田九州男・中村博司 1975 「豊臣時代大坂城遺構確認調査概報」『大阪城天守閣紀要』第3号 大阪
城天守閣
脇田 修 1979 「近世初期の都市経済」『日本史研究』200号 日本史研究会
内田九州男 1980 「天守台築造年代を考える - 元和八年(1622)か寛永元年(1624)か - 」『観光の大坂』No.346
大阪観光協会
北垣聰一郎 1981 「穴太の系譜と石材運搬」『日本城郭体系』別巻I 新人物往来社
岡本良一編 1982 「大坂城の諸研究」名著出版
村山朔郎 1984 「『大坂城』の地盤調査と地下石垣の発見」『大阪城天守閣紀要』第12号<大阪城学術調査報
告特集号> 大阪城天守閣
大阪城天守閣編 1984 「大阪城天守閣紀要」第12号<大阪城学術調査報告特集号> 大阪城天守閣
大阪市文化財協会編 1985 「特別史跡大坂城跡 - 大阪城内配水池改良工事に伴う発掘調査概報」 貢大阪市文
化財協会
北垣聰一郎 1987 「石垣普請」 法政大学出版社
佐久間貴士編 1989 「よみがえる中世(2) - 本願寺から天下へ - 大坂」 平凡社
渡辺武・内田九州男・北川 央 1989 「大坂城本丸地下石垣(豊臣時代天守台石垣)遺構ボーリング調査なら
びに試掘調査概報」『大阪城天守閣紀要』第17号 大阪城天守閣
中井 均 1990 「織豊城郭の画期 - 碓石建物・瓦・石垣の出現 - 」『中世城郭研究論集』 新人物往来社
松尾信裕 1994 「豊臣期大坂城の規模と構造 - 発掘調査から推定される豊臣期大坂城三ノ丸の範囲 - 」『大阪
市文化財論集』 貢大阪市文化財協会

- 小竹森直子 1996 「安土城の石垣・石垣に対する考古学的アプローチのための基礎作業-」『織豊城郭』第3号 織豊城郭研究会
- 中井 均 1996 「安土城前夜-主として寺院からみた石垣の系譜」『織豊城郭』第3号 織豊城郭研究会
- 松下 浩 1996 「穴太積の再検討-北垣麗一郎氏の議論によせて-」『織豊城郭』第3号 織豊城郭研究会
- 木戸雅寿 1996 「近年石垣事情-考古学的石垣研究をめざして-」『織豊城郭』第3号 織豊城郭研究会
- 千田嘉博他共編著 1996 「城の語る日本史」朝日新聞社
- 木戸雅寿 1997 「近年石垣事情-考古学的石垣研究を目指して-」『織豊城郭』第4号 織豊城郭研究会
- 中井 均 1998 「織豊系城郭の成立要素-南九州を事例として-」『織豊城郭』第5号 織豊城郭研究会
- 木戸雅寿 1999 「安土城が語る信長の世界」『駿府城をめぐる考古学』静岡考古学会
- 田中哲夫 1999 「城の石垣と濠」『日本の美術403』至文堂
- 野中和夫 2000 「豆州、大名丁場に関する研究序説-伊東市城・東伊豆町城の石丁場群より-」『竹石健二先生・沢田大多郎先生還暦記念論文集』竹石健二・沢田大多郎両先生の還暦を祝う会(日本大学文理学部学芸員過程研究室)
- 金森安孝 2000a 「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」『日本歴史』第626号 日本歴史学会
- 金森安孝 2000b 「仙台城築城記及び修復石垣」『月刊考古学ジャーナル』456号 ニュー・サイエンス社
- 我妻 仁 2000 「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」『宮城考古学』第2号 宮城考古学会
- 仙台市教育委員会文化財課編 2000 「仙台城本丸跡の発掘」仙台市教育委員会文化財課
- 森田克行 2000 「城の石垣」『考古学による日本歴史 6 戦争』雄山閣
- 内田九州男 2000 「大阪城研究の歩み」「大阪城と城下町」(渡辺武館長退職記念論集刊行会編) 恩文閣
- 国立歴史民俗博物館編 2000 「天下統一と城」展示図録 国立歴史民俗博物館
- 永原慶二 2000 「戦国時代」上・下 小学館
- 永原慶二 2002 「族生する戦国の城と町」「[歴博フォーラム]天下統一と城」 塙房
- 村田修三 2002 「中世城郭の諸相」「[歴博フォーラム]天下統一と城」 塙房
- 中井 均 2002a 「戦国の城から近世の城へ-石垣・瓦・天守から-」「[歴博フォーラム]天下統一と城」 塙房
- 木戸雅寿 2002 「織豊期城郭の石垣」「10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望」<織豊期城郭研究会第10回研究会資料集> 織豊期城郭研究会
- 中井 均 2002b 「織豊期城郭の礎石建物」「10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望」(前出)
- 織豊期城郭研究会編 2002 「10周年記念大会 織豊期城郭研究会10年の成果と展望」<織豊期城郭研究会第10回研究会資料集> 織豊期城郭研究会

地理的・地質的環境関係

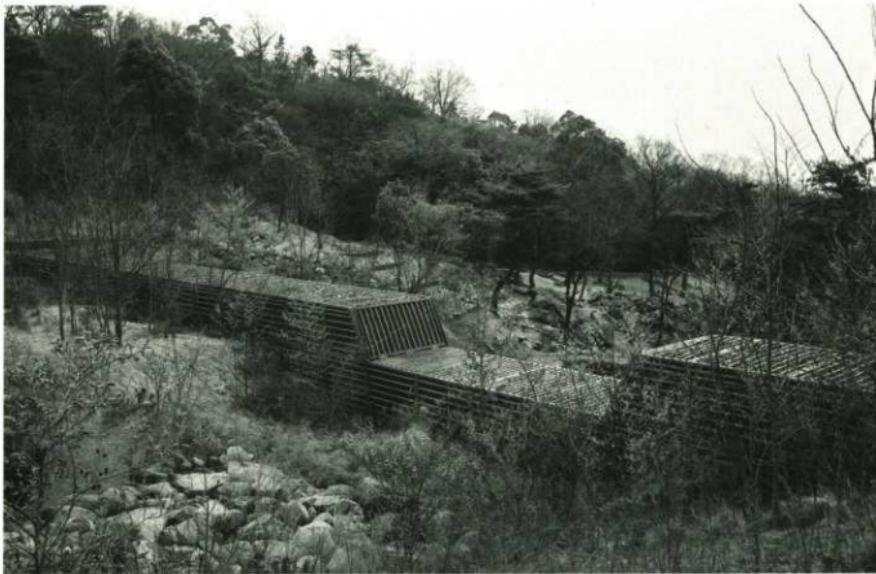
- 藤田和夫・笠間太郎・鈴川昭平・市原実 1959 「西宮地方の地質構造」「西宮市史」第1巻 西宮市
- 藤田和夫・笠間太郎 1965 「西宮市およびその周縁の地質-西宮市2万5千分の1地質図説明書」西宮市
- 藤田和夫・笠間太郎 1971 「六甲山地とその周辺の地質-神戸市および隣接地域地質図(5万分の1)説明書」神戸市企画局
- 前田保夫 1979 「六甲の断層をさぐる」(神戸の自然1) 神戸市立教育研究所
- 藤田和夫・笠間太郎 1982 「大坂西北部地域の地質」(地域地質研究報告5万分の1図幅) 通商産業省工業技術院地質調査所
- 前田保夫 1989 「六甲山はどうしてできたか」(神戸の自然21) 神戸市立教育研究所

歴史的環境-朝日ヶ丘遺跡・八十塚古墳群および芦屋市の埋蔵文化財

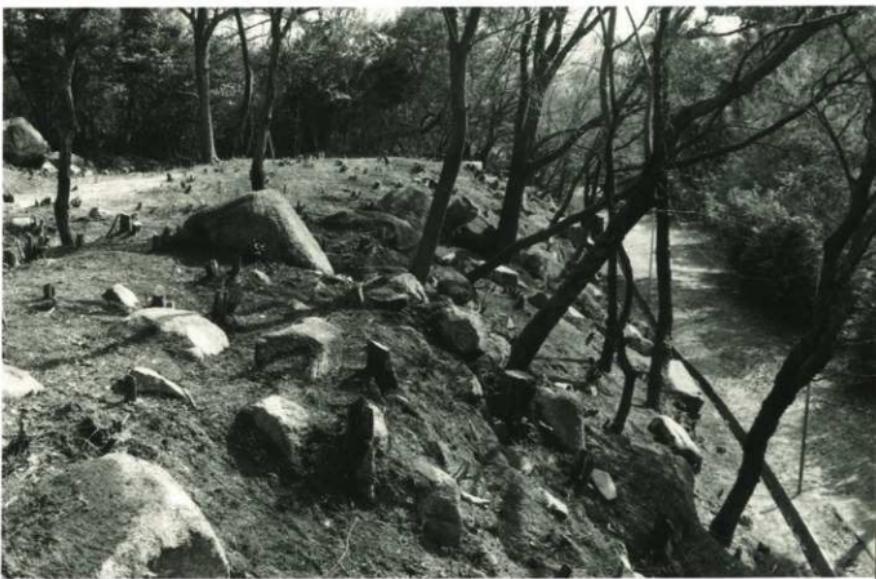
- 村川行弘 1959 「芦屋八十塚古墳調査概報」「芦屋市文化財調査報告 第1集」芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966a 「朝日ヶ丘先土器遺跡」「朝日ヶ丘縄文前期単純遺跡」「朝日ヶ丘古墳」「八十塚古墳群」「芦屋市文化財調査報告 第4集」芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1966b 「苦楽園五番町古墳」(文化財資料3) 西宮市教育委員会
- 藤岡弘・佐々木幸雄 1967 「芦屋市内古墳分布調査所見」「八十塚E号墳発掘調査」「芦屋市文化財調査報告

- 第5集 芦屋市教育委員会
- 藤井祐介・森岡秀人 1974 「朝日ヶ丘縄文遺跡・今下山遺跡」<芦屋市文化財調査報告第8集> 芦屋市教育委員会
- 勇正広・藤岡弘 1977 「老松古墳発掘調査終了報告・剣谷3号墳発掘調査終了報告」(西宮市文化財調査記録 1977-1) 西宮市教育委員会
- 勇正広・藤岡弘・古川久雄他 1978 「苦楽園の古墳」<西宮市文化財調査報告書第2集> 西宮市教育委員会
- 森岡秀人・古川久雄他編 1979 「芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人他 1983 「八十塚古墳群発掘調査概報—岩ヶ平支群F支群西地区の緊急調査成果概要」<芦屋市文化財調査報告第13集> 芦屋市教育委員会
- 山中一郎 1983 「朝日ヶ丘遺跡」 芦屋市教育委員会
- 山中一郎 1984 「朝日ヶ丘遺跡」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度」 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1984 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度」 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘 1985 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第19・27・30号墳」「兵庫県文化財調査年報 昭和57年度」 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘 1986 「八十塚古墳群岩ヶ平支群(22号墳)」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度」 兵庫県教育委員会
- 藤岡 弘 1987 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第22号墳」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度」 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1987b 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第33号墳」「八十塚古墳群岩ヶ平支群第43号墳」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度」 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1988b 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第44号墳」「兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度」 兵庫県教育委員会
- 山中一郎・森岡秀人・和田秀寿・関野農 1988 「朝日ヶ丘遺跡第4次発掘調査の概要」(昭和63年度埋蔵文化財速報) 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1990 「1980-1990年 この10年の文化財保護行政」「芦屋市教育委員会40周年記念誌」 芦屋市教育委員会
- 西川卓志・合田茂伸 1991 「八十塚古墳群剣谷支群第2号墳 第2次発掘調査報告」<西宮市文化財資料第34号> 西宮市教育委員会
- 西川卓志・合田茂伸 1994 「八十塚古墳群の三十八年間にわたる群集墳発掘調査の成果~」(西宮市立郷土資料館第9回特別展展示案内図) 西宮市立郷土資料館
- 合田茂伸 1994 「特別展八十塚古墳」「西宮市立郷土資料館ニュース」第15号 西宮市立郷土資料館
- 八十塚古墳群発掘調査団編 1994 「兵庫県芦屋市所在 八十塚古墳群岩ヶ平支群第52・53・54・55・56号墳発掘調査現地説明会資料」 八十塚古墳群発掘調査団(関西大学考古学研究室内)
- 西川卓志 2000 「八十塚古墳群老松町支群第3号墳の調査」「八十塚古墳群老松支群第4号墳の調査」「西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書」<西宮市文化財資料第44号> 西宮市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 「阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題—芦屋市における5年間をふりかえってー」「地震災害と考古学 I - 阪神・淡路大震災の被災状況と復興への取り組みー」 日本考古学協会阪神・淡路大震災埋蔵文化財対策特別委員会
- 兵庫県教育委員会 2000 「兵庫県遺跡地図-第1分冊(発掘調査の手引き・地名表)」 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人・荒木幸治 2001 「各都道府県の動向 28. 兵庫県」「日本考古学年報」52(1999年度版) 日本考古学協会
- 関西大学文学部考古学研究室編 2002 「八十塚古墳群の研究」<関西大学文学部考古学研究第7冊・芦屋市文化財調査報告第33集> 関西大学文学部考古学研究室

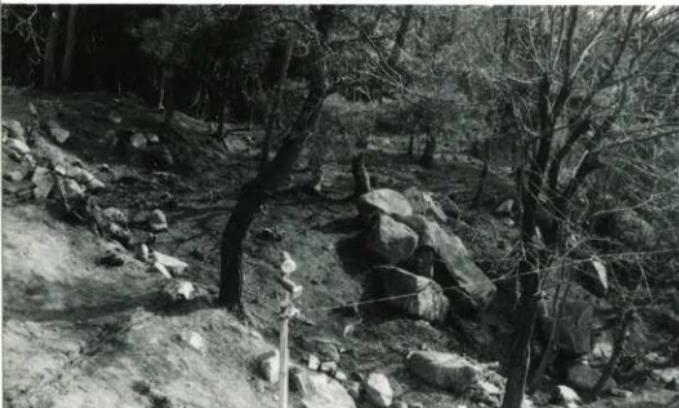
写真図版



調査地遠景（西から）



調査地全景（北西から）



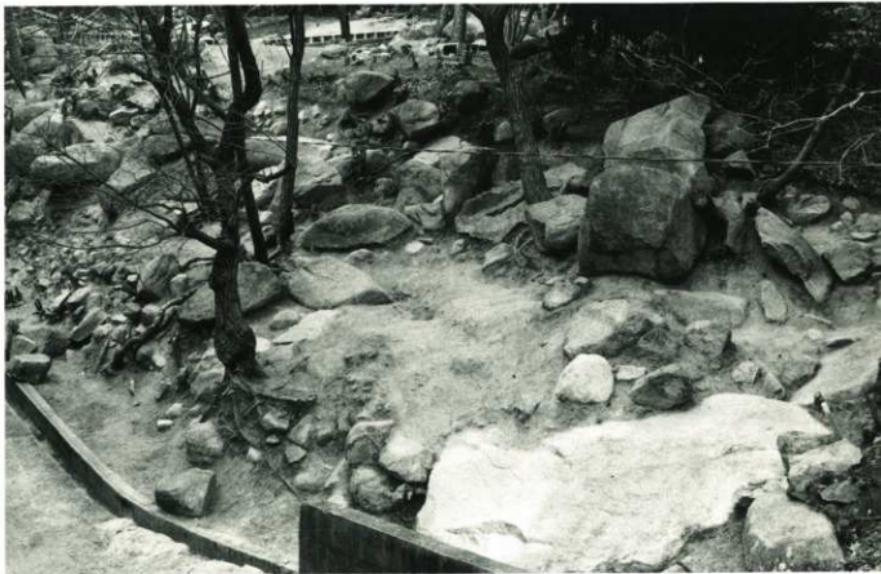
調査地北部
(北西から)



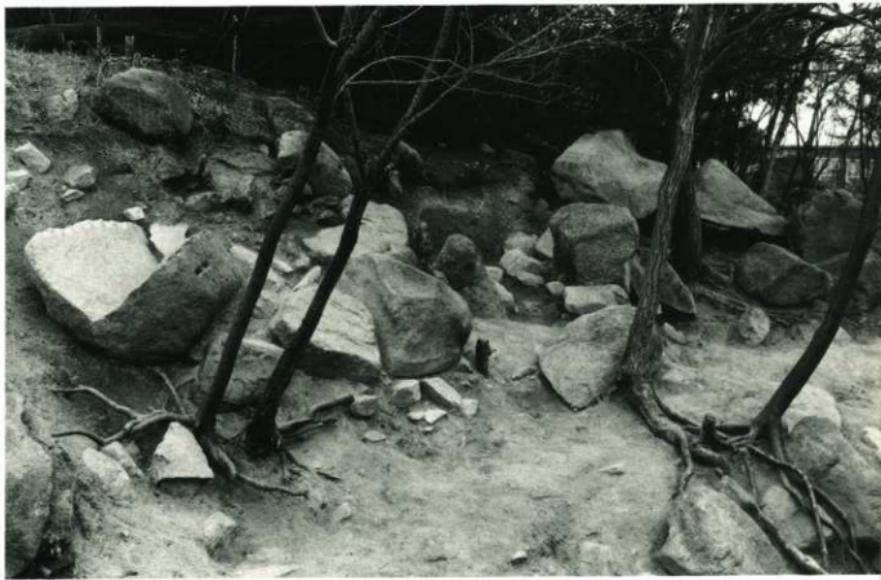
調査地南部
(北西から)



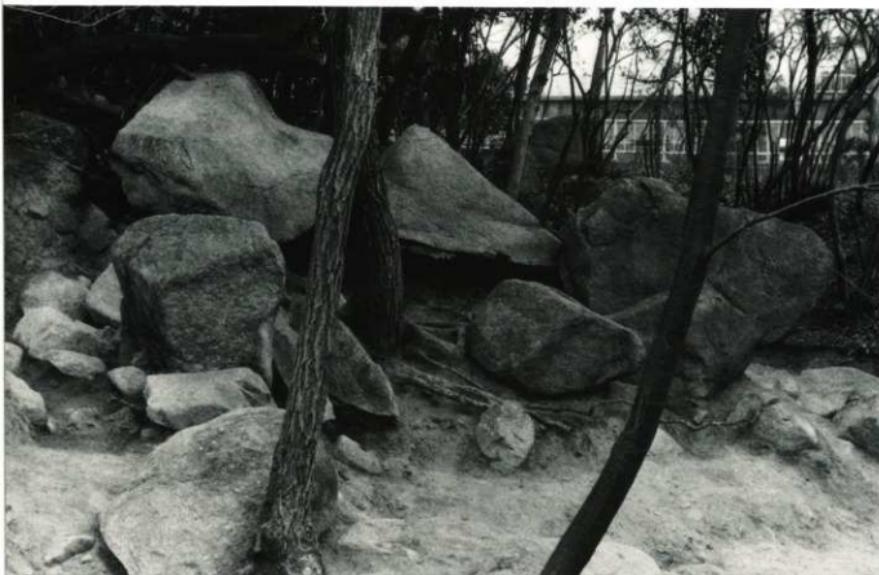
調査地全景
(南から)



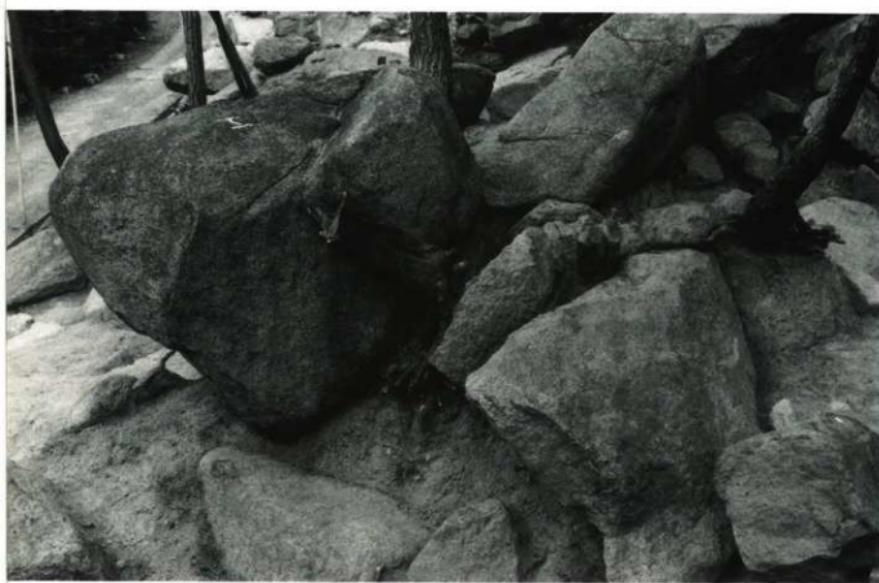
採石遺構 I 全景（南から）



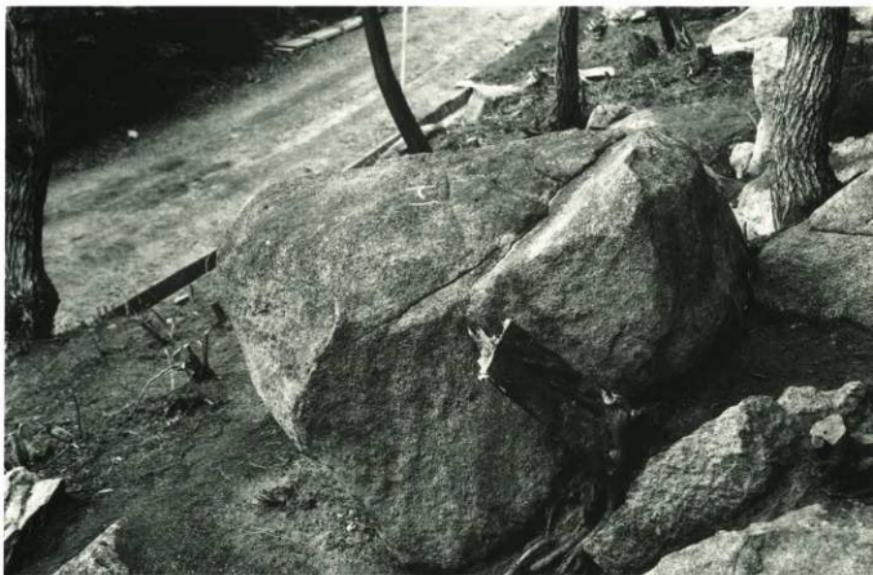
採石遺構 I 北部（西から）



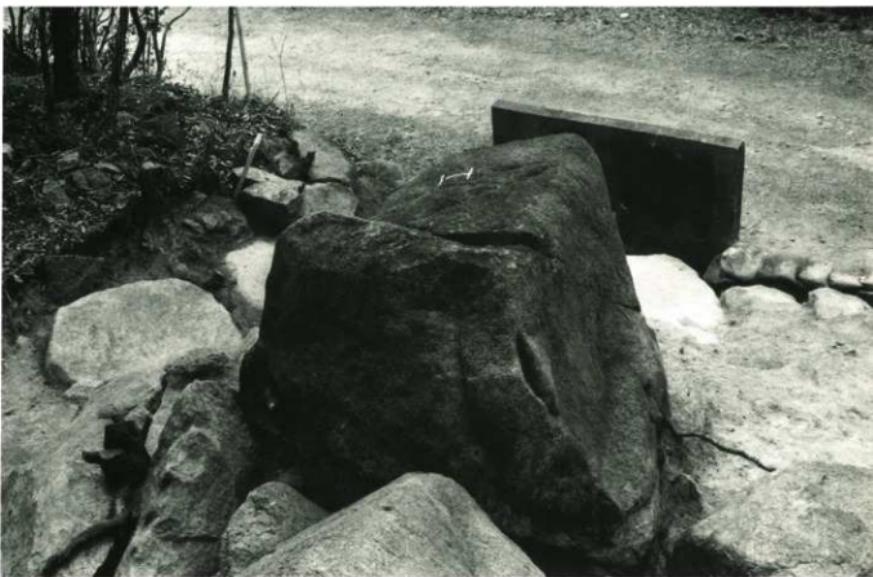
6・10号石材（北西から）



6・12・13号石材（南から）



6号石材（南東から）



6号石材（北東から）



7号石材（発掘前 南から）



7号石材（西から）



7号石材
(北から)



7号石材
(東から)



7号石材
(西から)